

ミルトンの結婚観と聖書

杉本 誠

ミルトンは1642年33歳の時に、王党派の家系の17歳のメアリ・パウエルと結婚した。彼はメアリこそ夢に描いていた理想の女性だと信じた。だが、彼女は約一ヶ月後に、ミカエル祭の頃までに戻って来ると言い残して実家に出かけたまま、ミルトンの再三の催促にもかかわらず戻って来なかった。ドニ・ソラの言うように、確かに妻の拒否はミルトンにショックを与えた⁽¹⁾ことだろう。この時期、彼にとって真の結婚とはいかなるものかを問い続けたのが、一連の離婚論パンフレットである。1643年8月、『離婚の教理と規律』*The Doctrine and Discipline of Divorce*の初版が匿名で、翌年2月、改訂増補した第2版がミルトンの頭文字を付され、しかも議会とウェストミンスター宗教会議に宛てた序論を加えて出版された。すると長老派から激しい糾弾の声が上がり、トマス・ヤングは説教の中で離婚・再婚の主唱者を警告した。8月にはハーバート・パーマーが、離婚パンフレットを焚書にすることを要求し、9月にはウィリアム・プリングが「好き勝手な離婚」(‘divorce at pleasure’)と揶揄した。さらに書籍出版業組合も著者を告発した。⁽²⁾ミルトンは7月に、同意見のドイツの神学者の著作を意識した『離婚に関するマーティン・ビューサーの判断』*The Judgement of Martin Bucer, concerning Divorce*を、離婚論争に援用した。1645年3月には、聖書の中の離婚に触れた4箇所を検討した『四弦琴』*Tetrachordon*と、長老派に対する反駁の意をこめた『懲罰鞭』*Colasterion*とを出版した。

ミルトンは結婚の不幸な現実を経験しながら、純粋な精神と強い召命意識を持ち、いずれもメアリとの和解に至る3年余の期間中にこれらを執筆した。そして、彼は自分の許に突然戻ったメア리를優しく迎え入れている。

さて、一連の離婚論の論理の展開は、普遍的な理念に基礎が置かれている。ミルトンは『離婚の教理と規律』において、「ここにあるのは純粋で聖なる神の律法である」⁽³⁾と訴えており、聖書を基礎にして考える彼のキリスト教的理念があらわれている。『四弦琴』の中でも、「敬虔と信仰こそがキリスト者の結婚生活の主要な絆である」⁽⁴⁾と述べて、一例として、「いかなる結婚生活も神への信仰がなければ堅固なものとはならない」⁽⁵⁾という聖アンブロシウスの言葉を引用して、結婚生活におけるキリスト教的要因の重要性を強調している。ミルトンが結婚の目的に関して述べている信念は、「結婚は神聖を汚すものと呼ばれてはならない」⁽⁶⁾とか「霊の慎み深さと優雅さ

において結婚を考える』⁽⁷⁾という、キリスト教的信仰に基づく結婚観であることが明示されている。

そこで本稿では、ミルトンの聖書に基づく結婚観が一連の離婚論パンフレットを通じてどのように展開されているかを探りつつ、彼が目指した理想の結婚像はどのようなものであったか、また、彼の晩年の大作『失樂園』の中で、アダムとイヴの結婚愛にどのように反映されているかを順を追って考察することにする。

まず最初に、結婚について当時の状況を概観しておきたい。ミルトンの時代、ウィリアム・ロードの管理下にある英国においては、教会法（canon law）が適用されていて、結婚は教会法の下で秘蹟であった。ミルトンによれば、当時の教会法は、「魂と肉体の両方が人間の善に対して不適合とわかって、一度結婚したら、どこまでも解消することなく持続しなければならない」⁽⁸⁾という、不当な束縛による法律であった。いわゆる別居は、姦通、虐待、異端、背教のあった場合のみ、教会裁判所によって認められていたが、別れた相手が存命中は再婚が許されていなかった。離婚は、血族結婚、不能、結婚の先約などがあった場合には認められていた。宗教改革において、ルターやカルヴァンは、結婚が秘蹟であることを否定した。従って、民事の契約行為として解消できるものとした。ほとんどのプロテスタント教会は彼等に倣い、姦通と遺棄の理由による離婚を認めるようになったが、英国国教会だけは例外であった。1563年の39箇条は、結婚が秘蹟ではないとしたものの、教会裁判所が別居の判決を下したり、正統ではない結婚を無効と決めたりする実権をもっていた。このためピューリタンたちはこれに反対して、実際、大主教ロードの時代に、この二つの理由によって別居を認められた当事者の罪の無い方の再婚の挙式をとり行なう聖職者も出てきたという。この慣行はウェストミンスター宗教会議から承認された。ミルトンが『離婚の教理と規律』初版の副題に「教会法の束縛と他の誤謬から、愛の規範の導きの下にあるキリスト者的自由へと回復するために」⁽⁹⁾と記し、離婚の問題は「宗教改革を推進する今こそ考える好機である」とタイトルページにうたいながら世に出たのは、会議の召集からちょうど一か月後の1643年8月1日のことであった。⁽¹⁰⁾このような背景から、ミルトンが結婚・離婚の問題に関して、この折に提言を試みようと思図したものと考えられる。

ミルトンは、結婚生活において、「創世記」第2章の、アダムのために「ふさわしい助け手をつくろう」（第18節）という神の意志による契約に依拠して、「ふさわしい、かつ楽しいカンヴァセーション」⁽¹¹⁾こそが「神の結婚の最初の定めの中で目的としたもの」⁽¹²⁾であり、「結婚の最も崇高な目的」⁽¹³⁾だとしている。「カンヴァセーション」とは、現代一般に用いられている「会話」（talk）の意味よりは「交わり」（society）の意味を強くもつ言葉である。⁽¹⁴⁾注目すべきなのは、ミルトンにあっては、この「楽しいカンヴァセーション」が、全く霊的な次元である魂の交わりといったことでとらえられていることである。「男女の魂のふさわしい結合は、二人を愛と親しい睦みに向けて一体化するようなもので、それは二人の心の一致がないところには、決して存在

しえない。]⁽¹⁵⁾だから、彼は「結婚は人間的な交わり (human society) であり、また、すべて人間的な交わりは、肉体よりも、むしろ精神から進められねばならない」⁽¹⁶⁾と考へて、結婚における精神の融合を強調している。すなわち、結婚の本質とは、ふさわしく釣り合った精神相互の敬愛、喜び、慰め、助けに満ちた交わりであると論じたのである。ここまでは、ピューリタンの説教者たちの結婚の教えと異なるものではなかった。ミルトンは、このような結婚観を十分に強調したうえで、結婚の本質を欠き、然るべき期間の努力にもかかわらず、精神の和合を見い出せない夫婦を永久にひとつ軛に縛り続けるならば、結婚の精神を汚し、ひいては結婚を定めた神の意志に反するから、離婚の自由を認めるべきだと考へた。長老派の説教者たちが、ふさわしい伴侶を選ぶことをひたすら勧めたのに対し、ミルトンが「性格の不一致」を離婚理由に加えるべきこと、当事者双方の再婚を認めるべきこと、離婚を個人の良心と決断に委ねるべきことを求めたのは革新的であった。

ミルトンは聖書の精神を重んじ、結婚を神と人との契約として把握した。契約は元来、きわめてヘブライ的な神学概念であり、17世紀前半の英国においても、ピューリタン神学の核心的な概念にまで到達し、神との新しい契約関係に立つという自覚が、ピューリタンたちに国教会の支配体制を脱して、改革的な生き方をする、その倫理的な基盤を与えた。従って、ミルトンが結婚を契約関係ととらえたということも、17世紀におけるこうした契約思想の展開の過程を背景にして考へてみる必要がある。

しかしながら、ミルトンにとって結婚は「神との契約」(箴言第2章17節)であるため、どんな理由があっても解消してはならないという、人間の自由意志を束縛する考え方には反対であり、「結婚は契約であるが、その契約は強制された共住とか、義務の偽りの遂行の事実の中にあるのではなく、偽りのない愛と平和の中にこそある」⁽¹⁷⁾のであり、「キリストと彼の教会の関係に似た厳粛な、聖なることであるから、当事者が信仰的である場合に成立する。……その本質は、他のあらゆる契約と同様に、相互束縛的であり……霊的な、この世的な慰めの交わりでなければならない」⁽¹⁸⁾と力説するのである。

ミルトンが結婚を神と人との契約として把握し、それは具体的には男女間の「愛と平和」となってあらわれ、さらに、もしその「愛と平和」とが当事者の一方によって乱される場合には、人は神との契約関係を破棄することになるから、結婚そのものを破棄されて当然である、と考へていることは明白である。結婚は相互束縛的な契約である。従って、モーセの律法の書である「申命記」の第24章1節に、「人が妻をめとって、夫となったとき、妻に何か恥ずべき事を発見したため、気に入らなくなった場合は、夫は離婚状を書いてその女の手へ渡し、彼女を家から去らせなければならない」と書いてあるから、結婚の相手に「何か恥ずべき事」があつて、「何か不貞のこと」⁽¹⁹⁾という肉体的な意味にも解釈されるが、ヘブライ語では、「何か不穩当、あるいは、何か真の臆面のなさ」⁽²⁰⁾という、精神的な意味にも解釈される)、その結果、家庭の「愛と平和」

が保てないならば、離婚することは理性に適うはずである。⁽²¹⁾それを否定するならば、人間の心と心の真の結びつきを否定することとなる。ミルトンは、結婚は他のあらゆる契約と同じように相互関係であり、一方が破棄すればその契約自体が破棄されるという契約概念を取り入れたのである。⁽²²⁾

さらに彼は、「聖書も理性も離婚に関してこうした不公正な厳しさを課さなかったので、そのような厳しさを考えだしたのは、教会法学者の、文字に縛られた奴隷根性をおいてほかはない」⁽²³⁾と論じ、国教会が教会法にのっとった離婚許可と、再婚禁止を振りかざしていることに対して、叛旗をひるがえすのである。

ミルトンが、こうした教会法の矛盾について主張する時、モーセの律法を根底において、聖書から一貫した論理を展開することによって、離婚論の思想を裏づけていることに注目しなければならぬ。だが、当時の英国議会や聖職者たちは、ミルトンのそうした見方をどのように受けとめたであろうか。ミルトンは、彼等は聖書におけるモーセの律法を誤って解釈し、しかもそれを乱用した、と述べている。すなわち、「結婚以外に人間の慰めと喜びに何が設けられたか。それでいて、モーセによって与えられた離婚法の乱用者たちに対して、主として向けられた何か聖書からの誤れる解釈が、結婚の祝福を全く親しい同棲の不幸に沈ませ、すくなくとも逃げ場のない、救済のない、意志を失い、何の慰めもない家庭の奴隷に変化させた。」⁽²⁴⁾

しかし、ミルトンは「良き律法は善人のために作られ、正直な自由は不正直な免許への最大の敵である」⁽²⁵⁾と論じる。換言すれば、モーセの律法こそ善人のために作られ、自由をもつものであり、不正直な免許を持つ教会法の最大の敵だと言うのである。だから、離婚の自由ということも、次のように説明している。「離婚は恨みのために許されるべきではない。また、一時的な和解できそうな屈辱のためにも許されるべきではない。それはただ、純粋な確かな十分にあらわれた不適合によってだけ許されるべきである。離婚がモーセの律法のもとに、明らかに処理された場合は全く正当である。」⁽²⁶⁾

ミルトンにとって、モーセの律法は道徳的公正と、自然に対する配慮に満ち、真面目で慎重な律法であった。それゆえ、議会や高位聖職者たちが、なぜ自由な律法を十分に理解しないで、奴隷的な迷信に堅く立つのか、そうした矛盾に対して敢然と戦ったのである。

しかしながら、ミルトンも、キリスト自身の離婚を禁止する言葉の処理には、慎重に対処しなければならなかった。「神が結び合わせたものを引き離してはなりません。……モーセは、あなたがたの心がたたくので、その妻を離別することをあなたがたに許したのです。しかし、初めからそうだったのではありません。まことに、あなたがたに告げます。だれでも不貞のためでなくて、その妻を離別し、別の女を妻にする者は姦淫を犯すのです」という、「マタイによる福音書」(第19章6-9節)のキリストの、「不貞」以外の理由では離婚を認めないという言葉を、ミルトンはキリストの言葉の対象となった偽善者パリサイ人、「不貞」の原語の解釈などを持ち

出して弁明を試み、「不貞」という言葉が、モーセの使った「恥ずべき事」に相当することからして、「不貞」の拡大解釈を試み、この言葉の意味するところは、単に姦淫にとどまらず、結婚という神聖な契約を破棄するに至る種々の行為——精神的な行為をも含めて——を指すものと解釈する。⁽²⁷⁾

こうしてミルトンは、キリスト者は旧約のユダヤ人と同じ理由をもって離婚し、さらによりよき魂と結びあうことができると主張し、「福音の下においても、われわれの従順を要求するのは律法である」⁽²⁸⁾という結論と、「神は愛なしに人間に戒めを与えたことはないのだから、人間も愛なしに神の戒めを正しく信ずることはできない」⁽²⁹⁾という結論に達する。後者の結論に関しては、聖書の言葉をキリストにおいてあらわされた神の愛に照らして考えるべきであるということである。これは『四弦琴』の「神は不可能なことをお命じになることはない」⁽³⁰⁾という言葉と呼応している。離婚の実際に即して言えば、生来の「性格上の不一致」のある夫婦は、個人内面の良心に委ねて、離婚して第二の配偶者を求めることが人間の利益にふさわしいことであり、神がその離婚を禁ずるようなことをお命じになるはずがない、という意味である。ここには、教会法の権威から脱したプロテスタントの新しい離婚思想の萌芽がうかがえるのである。

ミルトンは、離婚の禁止が、人間性の真の理解に欠くものであると考えた。『離婚の教理と規律』の中で、「失われた楽園が物語る一切のことがわれわれに能うことだと愚かにも考えるより、シナイ山の律法がわれわれの力量に合ったものとして定めたことに厳粛に従うべきである」⁽³¹⁾と述べている。すなわち、「楽園の——元初の完全」は、「墮落の状態」⁽³¹⁾にとって代わられたという、人間性の認識である。この点に、後の『失楽園』の構想がこの頃すでもたれていたこと、しかも結婚愛との関連において考えられていたことが窺われるのは、注目に値する。

さて、われわれは、ミルトンが一連の離婚論パンフレットで説いた結婚の本質が、『失楽園』のアダムとイヴの墮落前の美しい結婚愛の中に具現されているのを見出すことができる。『失楽園』のイヴは、ミルトンの描いた女性の中で最も美しい女性である。ここには『コウマス』の淑女とは異なった意味で、理想の女性が描かれている。第4巻のアダムとイヴの墮落以前の楽園での結婚生活において、美しいイヴの姿がルネッサンス文学の精神に見られるような華やかさで描かれている。イヴの美しさを強調するために、彼女が神話や伝説中の女神などと頻りに比較されている。⁽³²⁾イヴの「ほっそりした腰」(第4巻304行)、「彼女の飾りのない豊かな金髪」(305行)、「盛り上がった胸」(495行)などの外的な美しさばかりでなく、「無邪気さと乙女らしいしとやかさ」(第8巻501行)、「身振りすべてに品位と愛情が満ちあふれ」(489行)、「控え目で」(504行)、「さらにやさしく女らしい姿」(第9巻458行)にイヴの内的な、精神的な美しさを見ることが出来る。さらにアダムに対する素朴で純粋な愛情の中に、われわれはミルトンの求めている理想の女性を見出すのである。

『失楽園』第8巻には、イヴの創造の経過が描かれている。アダムには、神より全地の生き物

すべてを統治する力が与えられている。しかし、アダムは「同等でないものの中に、いったいどんな交わり、どんな調和、どんな真の喜びがあるのでしょうか？交わりは、正しいつり合いを保って相互に与えたり、与えられたりするところに生じるのではないのでしょうか」（第8巻383-386行）と述べているように、それらとの間に、「交わり」、「調和」、「真の喜び」を見い出すことができない。彼は「すべての理性的な楽しみをともに味わうのにふさわしい交わり」（389-391行）を訴え、「似た者が交わることによって、自分の欠陥を是正し、癒したい」（418-419行）と願う。神はアダムのために「お前によく似た者であり、お前に適した助力者であり、お前のもう一つの自分であり、お前の心の望みにかなった、まさに願いどおりの者」（450-451行）としてイヴを創造する。つまり、アダムはふさわしい伴侶との理性的な交わりを求め、神がそれを確認した上で、イヴを創造したわけである。このように、ミルトンは離婚論における結婚の本質に基づいてイヴの創造を描写している。われわれはアダムとイヴの結婚愛の中に、ルネッサンスの精神とピューリタニズムの精神の融合、すなわち、ミルトンのキリスト教的人文主義と理性への信頼の精神の調和を見ることができるのである。

さて、ミルトンの考える結婚における崇高な目的である、男性と女性の「ふさわしい精神同志の交わり」「conversation」について、もう少し具体的に見てみよう。“conversation”は、“unequals”との間には成立し得ないとすれば、当然 equal に求められるわけである。しかし、ミルトンによれば、女性は男性と equal に存在するのではなく、“likeness”に存在するに過ぎない。彼は男女の不同を次のように説明している。

though both

Not equal, as their sex not equal seemed;
 For contemplation he and valour formed,
 For softness she and sweet attractive grace,
 He for God only, she for God in him:
 His fair large front and eye sublime declared
 Absolute rule; and hyacinthine locks
 Round from his parted forelock manly hung
 Clustering, but not beneath his shoulders broad:
 She as a veil down to the slender waist
 Her unadorned golden tresses wore
 Dishevelled, but in wanton ringlets waved
 As the vine curls her tendrils, which implied
 Subjection, but required with gentle sway,

And by her yielded, by him best received,
 Yielded with coy submission, modest pride,
 And sweet reluctant amorous delay. (IV, 295-311)

ところで、その性が一見して
 等しくないのと同じく、二人は等しい存在ではなかった。
 彼は思索と勇気のために造られ、
 彼女は柔和と魅惑的な優美とに、
 彼はただ神のみのため、彼女は彼の中にある
 神のために造られた。
 彼の美しく広い額と気高い眼は、
 絶対的な支配を示していた。そのヒアシンス色の髪の毛が、
 アダムの左右に分けられた前髪のあたりから
 男らしく房々と下がっていたが、
 その広い頑丈な肩から下にはいたらなかった。
 イヴの飾りのない豊かな金髪は、ほっそりした腰の
 ところまでヴェールのように垂れ下がり、
 葡萄の蔓のような豊かな巻毛となって
 ゆるやかに波打っていた。この長い髪は、
 服従を意味していた。しかし、それは優しい力で求められて
 初めて与えられる、従う風情の中にも恥じらいの色や
 控え目な誇りを見せ、やさしくいやがる風情を
 見せつつなまめかしくためらう、それだけに彼の方も
 一層の喜びをもって受け入れる、といった服従なのだ。

ミルトンは男女の本質を、男性は「思索と勇気」、女性は「柔和と魅惑的な優美」としている。また外見上の特徴として、男性は「広い額、気高い眼、ヒアシンス色の髪の毛、広い肩」であり、女性は「ほっそりした腰、ヴェールのような金髪」として対照させている。髪の毛の長さが男性は肩まで、女性は腰までとされているのは「コリント人への第一の手紙」11章9-10節の「男は女のために造られたのではなく、女が男のために造られたのだからです。ですから、女は頭に權威のしるしをかぶるべきです」、及び14-15節の「男が長い髪をしていたら、それは男として恥ずかしいことであり、女が長い髪をしていたら、それは女の栄光であるということです。なぜなら、髪はかぶり物として女に与えられているからです」とあるのが根拠となっている。ミルトンは、

女性がヴェールのように長い髪を持つということは、権威のしるしとしてのおおいを頭に載せていることの象徴と考えている。それに、葡萄の木がその蔓を巻くように、女性の髪が波打つさまは、ホメーロス作の『オデュッセイア』以来、伝統的な、男性に服従する女性の暗喩を踏まえたものである。つまり、ミルトンは古代ギリシアの古典文学と聖書を基礎として、アダムとイヴの描写をしているのである。

上の引用の299行の「彼はただ神のみのため、彼女は彼の中にある神のために造られた」は、特にミルトンの女性観を顕著に示す箇所である。ミルトンにとって、女性は直接に神に仕えるのではなく、男性に対して義務を果たすことによって、間接的に神に仕えるべき存在である。このような女性が“the inferior”であるという彼の観念は、全巻を通じて随所に表現されている。例えば、ラファエルが、アダムに天体運動について説明する場面では、イヴをその席から外させ（第8巻40-41行）、ミカエルが、アダムに世界の未来を示す場面でも、イヴを眠らせて（第11巻367-368行）、彼女は後からアダムを通して知識を授けられるという具合に、女性が男性に比べて“the inferior”であることを示している。アダムにイヴを「私の骨からの骨、私の肉からの肉、いいえ、私自身なのです」（第8巻495行）、「私自身の像を示す美しき者よ、愛すべき私の半身よ」（第5巻95行）と呼ばせ、あるいは二人の関係を「相互の助け合いと相互の深き愛情に恵まれ」（第4巻727行）、「愛情と相互の尊敬に結ばれた夫婦」（第8巻58行）、「自分に寄り添ってくれる者の愛情」（第8巻426行）と表現しながらも、ミルトンは一方で、イヴには、アダムに「私の導き手であり頭」（第4巻442行）と呼びかけさせている。知識の優劣に関する例と合わせて、二人は決して“equal”ではない。ミルトンの意識の中では、男性と女性は対等に扱われているわけではないのである。

このようにみえてくると、ミルトンにとって夫と妻は聖書に基づく神の定めた秩序の中に厳然と配置されているのである。すなわち、ミルトンはあくまで、夫→妻というヒエラルキーの枠内で“conversation”を結婚の本質とし、夫の“absolute rule”と妻の“subjection”とが結合してこそ、結婚の秩序が保たれるのであるという結婚の本質論を明確にしている。要するに、女性が男性の支配と威厳とに服従することによって、女性の幸福と理想とが見い出されるという女性観を明らかにしている。従ってラファエルに、アダムに対してイヴを慈しみ、尊敬と愛情をもって、服従はしないようにと警告させている（第8巻568-570行）。このように、ミルトンの理想的な結婚観とは「コリント人への第一の手紙」11章におけるパウロの考え方に基づいた、厳然たる秩序内での夫婦観である。しかし、ルネッサンス期の結婚に関する文献の詳細な研究⁽³³⁾からもわかるように、男女のヒエラルキーは、ミルトンの時代には社会通念であった。むしろ、結婚の本質を“conversation”に、また「相互の愛と尊敬」（第8巻58行）においた点にこそ、ミルトンの近代的な特徴が出ていとみなすことができよう。

(注)

- (1) Denis Saurat, *Milton: Man and Thinker* (London, 1964), p.47.
- (2) Christopher Hill, *Milton and the English Revolution* (Viking Press, 1977), p.131.
- (3) Don M. Wolfe, gen. ed., *Complete Prose Works of John Milton*, Vol.II (New Haven: Yale University Press, 1973), p.232.
- (4) *Ibid.*, p.591.
- (5) *Ibid.*, p.698.
- (6) W. R. Parker, *Milton: A Biography* (Oxford, 1968), p.227.
- (7) *Ibid.*, p.227.
- (8) *CPW*, II, p.235.
- (9) *CPW*, II, p.221.
- (10) *CPW*, II, pp.145-46.
- (11) *CPW*, II, p.235.
- (12) *CPW*, II, p.235.
- (13) *CPW*, II, p.235.
- (14) *CPW*, II, p.612.
- (15) *CPW*, II, p.326.
- (16) *CPW*, II, p.275.
- (17) *CPW*, II, p.254.
- (18) *CPW*, II, p.630.
- (19) *CPW*, II, p.244.
- (20) *CPW*, II, p.244.
- (21) *CPW*, II, p.244.
- (22) 新井明著『ミルトンの世界』(研究社, 1980年) 100-117ページ参照。
- (23) *CPW*, II, p.495.
- (24) *CPW*, II, p.235.
- (25) *Parker*, p.243.
- (26) *CPW*, II, p.240.
- (27) *CPW*, II, p.337.
- (28) J. Max Patrick, ed., *The Prose of John Milton* (New York, 1967), p.167.
- (29) *Ibid.*, p.183.
- (30) *CPW*, II, p.585.
- (31) *CPW*, II, p.312.
- (32) 例えば, more adorned,/More lovely than Pandora (IV, 713-714), like a wood-nymph light/Oread or dryad, or of Delia's train (IX, 386-387), nymph-like step (IX, 452), A goddess among gods (IX, 547) などの表現に比較されている。
- (33) *Mary S. Weinkauf, Dalila: The Worst of All Possible Wives* (New York, 1973), pp.135-147.